

保護回復事業計画評価検証シート

- 1 保護回復事業計画 対象種名 オオルリシジミ
 2 計画策定年度(評価基準年度) 平成 19 年度(2007 年度)
 3 保護回復事業計画の評価年度 平成 26 年度(2014 年度) 1回目
令和 7 年度(2025 年度)

4 計画の概要

(1) 現計画における課題

- ・本種の生育に適した環境の維持管理手法の確立、それを継続的に行いうる体制づくり
- ・飼育個体の野生導入にあたっての遺伝的特性の維持

(2) 現計画の目標・取組事項

- ◆目標
- ・自然個体群が安定的に生息する状態に回復・維持
 - ・食草となるクララの確保により、生息可能域の拡大
- ◆取組事項
- ①生態調査
 - ②生息環境の確保
 - ③監視活動と普及啓発
 - ④飼育個体の野外導入

5 計画策定以降の対象種の動向・現況

評価指標	計画策定時	前回評価時	今回評価時	動向
自然発生集団	H19年(2007年) 3地域	H26年(2014年) 3地域	R7(2025年) 3地域	➡
自然個体群の回復(安曇野市)	H19年(2007年) 放蝶個体が未定着	H26年(2014年) 自然発生が5年間継続	R7(2025年) 減少傾向	↘
自然個体群の回復(東御市)	H19年(2007年) 放蝶によらず自然発生	H26年(2014年) 自然発生が継続	R7(2025年) 増加傾向だが、違法採取が増加	➡
自然発生の個体数(飯山市)	H19年(2007年) 234個体(推定)	H26年(2014年) 32個体	R7(2025年) 不安定	➡
個体群の定着(千曲市)	H19年(2007年) —	H26年(2014年) —	R7(2025年) 未定着	—

- 補足事項
- ・安曇野市の個体群は原因は不明ではあるが、2017年をピークに発生数は減少の一途を辿っている。
 - ・東御市の個体群は個体群は増加傾向にあるものの、違法採取が増えている可能性があり、横ばい傾向とした。
 - ・飯山市の個体群は大きな減少は見られないものの、不安定な発生量のため横ばいとした。
 - ・千曲市はまだ保護活動中であり、個体群は未定着である。

矢印凡例



増加



微増



横ばい



微減



減少

6 保護回復事業計画の見直し

計画継続に関する決定	<p style="text-align: center;">(計画継続) (部分的修正を含む)</p>	<p style="text-align: center;">計画見直し (計画終了を含む)</p>
------------	--	--

<p>計画継続時の 配慮事項 ／ 見直し時に 必要な事項</p>	<p>◆計画継続に伴う配慮事項</p> <p>①生態調査 個体数の減少や不安定な地域あるため、引き続き保護団体と協力しその原因についても確認していく。</p> <p>②生息環境の確保 食草であるクララを保護・増殖していくことがオオルリシジミの生息域の拡大に繋がるため、そのことを普及啓発していく。</p> <p>③監視活動と普及啓発 違法採取が増加傾向にある地域も見られるため、県条例に指定された種であることや保護活動の普及啓発を通じ、保護意識の向上を促す。</p> <p>④飼育個体の野外導入 現在千曲市で行われている保護活動により、新たな生息地が増加する可能性があるため、その活動の広報や環境保全研究所等による技術的な知見の提供により支援を行う。</p>
--	--

付表2

保護回復事業計画 「評価シート（計画策定者）」

1 保護回復事業計画策定者による自己評価


(1) 評価者 長 野 県

(2) 評価における特記事項

オオルリシジミの生息地域は3地域におよび、地域ごとの経過や特性も異なっているが、ここでは、それぞれの地域の取組の横断的な自己評価を示した。なお、「姨捨の棚田オオルリシジミ保存会」によって2021年から千曲市で行われている事業は、まだ定着はしていないが個体の増殖及び普及啓発を積極的に行っているため、意見を伺った。

(3) 取組の評価と現状に関する意見

①取組内容の評価

項 目	評価	コ メ ン ト
取組の方法は適切か	○	保護回復計画の目標（共通）（①自然状態で安定的に生息する状態に回復・維持、②食草となるクララの確保により生息可能域の拡大）に向けて、保護回復事業計画の計画事項（①生態調査、②生息環境の確保、③監視活動と啓発活動、④飼育個体の野生導入）は概ね適切な方法であった。
取組の頻度は適切か	△	保護回復事業計画の計画事項（①生態調査、②生息環境の確保、③監視活動と啓発活動、④飼育個体の野生導入）は概ね適切に取り組みれていたが、全ての地域で自然発生個体の減少傾向が示されたことから「やや不足」の評価とした。
取組の成果 （対象種の動向）		保護回復事業計画の計画事項は適切に取り組みられているが、全ての地域で個体数が減少傾向を示していることから「減少」の評価とした。新たな生息地として、千曲市で導入が試みられているが、近年の猛暑の影響等もあり、まだ定着はしていない。

評価凡例〔◎:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分 ー:判定外〕

動向凡例〔増加:↑、微増:↗、横ばい:→、微減:↘、減少:↓〕

②計画と取組の課題・問題点及び改善点

計画・取組 の課題・問題点	<ul style="list-style-type: none"> ①近年の猛暑等の原因により自然状態での生息数の減少 ②食草であるクララの安定的な確保及び生息域の拡大 ③違法採取防止のための監視活動の継続と普及啓発活動 ④現在新たな生息地にするために活動している千曲市での定着
------------------	--

計画・取組 の改善点	①地域ごとの減少原因の調査、確認を検討 ②ケララの生息域拡大のための普及啓発 ③違法採取防止のための県条例の啓発活動 ④保護活動の広報や環境保全研究所等の技術知見の提供
---------------	---

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に 関する意見	計画策定時と比較して生息、繁殖状況は引き続き悪化傾向であり、今後も減少原因の調査や生息地の拡大に向けて県、保護団体とともに取り組む必要がある。活動の拡充や情報共有が今後も必要であることから、計画を継続したい。
計画継続時の 配慮事項／ 見直し時に 必要な事項	現状では県が計画事項に引き続き取り組みながら、当面は減少原因の調査や生息地の拡大により保護回復事業計画の効果を確認することが必要である。

付表3

保護回復事業計画 「検証シート（研究機関）」

1 取組と対象種の現状に関する意見

(1) 検証者 長野県環境保全研究所

(2) 取組と対象種の現状に関する意見

①対象種の動向

評価項目	評価	確実性	意見・付記事項
個体数	↘	B	安曇野での減少傾向、飯山での不安定な発生量、千曲市での増殖個体の未定着は、いずれも個体群の安定な維持にとってのリスク要因の存在を示しており、原因の解明と対策が望まれる。
生育地数	→	A	千曲市での増殖の試みは、未定着とはいえ、リスク分散の戦略として評価できる。かつては県内に広く生息していた記録があり、現在は活動のある4地域以外には生息していないため、県内集団の遺伝的な地域分布を考慮しつつこの方向を推進することが望ましい。
生息環境	↘	C	指摘のある猛暑または温暖化の影響（4地域のうち3地域）の動向が懸念されるため、高冷地などでの生息域外保全の検討が望まれる。

評価凡例〔増加:↑、微増:↗、横ばい:→、微減:↘、減少:↓〕 確実性凡例〔A:高い、B:やや高い、C:やや低い、D:低い〕

②対象種の動向を踏まえた取組の改善点

項目	意見・付記事項
相互連携の促進	担い手・参加者の不足や高齢化、飼育ボランティアの育成などが共通の課題となっているため、これを補うため4地域相互の連携・協力の促進が望まれる。
外部支援体制の強化	上の担い手不足などの課題への対策を強化するため、自然共生サイトの関係者を含む市民、企業、大学、市町村、県など外部からの支援体制の強化が望まれる。
生息域外保全の検討	猛暑または温暖化によるダメージが継続する場合、県内個体群の存続にとって深刻な脅威となりうるため、これを回避するための域外保全エリア設定の検討が望まれる。

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に関する意見	計画を継続し、取組の改善点に着手しつつ、計画をできるだけ早期に見直し、策定時から変化した現状とこれに必要な対策に沿った内容に改訂することが望まれる。
計画継続時の配慮事項 ／ 見直し時に必要な事項	担い手不足の解消、飼育ボランティアの育成などの共通課題に対応する方策として、相互連携の促進や外部支援体制の強化のあり方を具体化するとともに、域外保全の実施手順をも明確にすることが望まれる。食草クララをはじめとした植生の管理や違法採取の防止も必要となるため、自然共生サイトなど保全エリアの境界や管理者が明確な取組との連携も有望な選択肢と考えられる。

保護回復事業計画 「評価シート（保護回復実施者）」

1 保護回復実施者による取組の自己評価

(1) 評価者 安曇野オオルリシジミ保護対策会議

(2) 取組における特記事項

- ・保護区における安定した自然発生の継続を目指し、野焼きや草刈り、園内のクララ自生地拡大を図る。
- ・地元有志によるクララの増殖や無料配布によって、周辺への生息地拡大の下地が出来てきている。
- ・自然発生個体は2017年をピークに減少の一途。原因は調査中だが夏場の猛暑による影響が疑われる。
- ・2022年、「安曇野のオオルリシジミ」として市天然記念物に指定されると共に、『保存活用計画』を策定して具体的な保全策を盛り込んだ。
- ・個体群維持のため2024年より人工飼育にも力を入れる。飼育ボランティアの育成が急務。
- ・2025年には市内企業等の敷地への試験放蝶実施。飼育放蝶による生息地拡大を図る。

(3) 取組の評価と減少に関する意見

①取組内容の評価

項 目	評価	コ メ ン ト
取組の方法は適切か	◎	国交省(国営公園管理センター)、安曇野市、研究者、飼育ボランティア、地元住民等が保護対策会議に集まり、毎年の発生状況や課題の洗い出し、年間の活動計画を協議、実施している。保護回復計画の内容が現状と合っておらず、市の天然記念物「安曇野のオオルリシジミ」に指定された際、『保存活用計画』を策定、本質的価値の洗い出し、市民と協働の保全を目指す具体的な活動目標を掲げていて、現在はこれを取り組みの柱としている。
取組の頻度は適切か	◎	国営公園内の保護区やその周辺で行われる野焼きや草刈りなどの生息地保全や、地元団体によるクララの増殖、飼育ボランティアによるバックアップ(保険個体群)の確保、研究者による減少要因の究明、国営公園内放蝶区における一般公開(イベント・観察会)など、対策会議に集まる団体・個人による主体的で多様な取り組みが展開されている。
取組の成果(対象種の動向)	△	保護区における自然発生は16年にわたり継続していて、保全の中心的な役割を担ってきた。しかし、2017年をピークに発生数は減少の一途を辿っている。原因は不明であるが近年の猛暑が疑われる。そのため人工飼育にも注力する方針を打ち出し、2014年度より飼育ボランティアの育成や他のクララ増殖地(企業や団体の敷地)への試験放蝶など新たな展開を図っている。

評価凡例〔◎:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分 -:判定外〕 矢印凡例〔増加↑ 変化なし→ 減少↓〕

②明らかとなった課題・問題点

計画・取組の課題・問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・自然発生の減少要因の究明が待たれる。猛暑のほか保護区のクララが大株になり空間を狭めた可能性もある。保護区の環境改善も課題。 ・遺伝的多様性が低い個体群のため、複数の人工飼育(バックアップ)や域外保全によるリスク分散を図る必要がある。自然発生個体の減少を受け、飼育ボランティアの育成や域外保全の取り組みが急務となっている。
--------------	--

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・保護回復計画の内容が古く現状と合っていない。現在は市の天然記念物「安曇野のオオルリシジミ」に指定された際に策定した『保存活用計画』を取組みの柱としている。県の保護回復計画の見直しを行い、市の保存活用計画との整合性を図る必要がある。
------------	--

付表1

保護回復事業計画 「評価シート（保護回復実施者）」

1 保護回復実施者による取組の自己評価

(1) 評価者 北御牧のオオルリシジミを守る会 会長 渡辺 正喜

(2) 取組における特記事項

前回の回答の「放蛹」による個体群維持という方法は、現在は不可能である。状況では、永代飼育担当者の高齢化・減少、食草クララの減少・会員の減少、永代飼育の方法の異なる意見等組織内部の状況が生じている。前回同様に、卵・幼虫・蝶・蛹等は地域外に出さないという大原則を守る。

(3) 取組の評価と減少に関する意見

①取組内容の評価

項目	評価	コメント
取組の方法は適切か	○	自然発生しているという見解により「放蛹」を止めてきたが地域住民からもオオルリシジミが飛ばないという現状から放蛹の方向へ転換を進めている。
取組の頻度は適切か	○	放蛹の方向転換を進めているが永代飼育員の高齢化・減少。後継者が現れない。市の担当部門が変わり兼務という状況である。
取組の成果 (対象種の動向)	△	蝶が飛ぶ時期にパトロールをすると前より成虫の姿が以前よりも増えている。しかし、盗蝶や盗卵者が増えている感じがする。

評価凡例 [◎:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分 -:判定外] 矢印凡例 [増加↑ 変化なし→ 減少↓]

②明らかとなった課題・問題点

計画・取組の課題・問題点	①町が自然発生しているという認識からの転換。 ②永代飼育者の高齢化と減少、後継者不足。 ③食草クララの減少「クララの見守手の減少」④市の担当部門がよく変わり、いくつかの仕事を兼務していて、対応が不十分。
--------------	---

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に関する意見	①現状の会員が永代飼育できる範囲で継続が可能である。 ②食草クララを会員の手が入る箇所に株を増やし育てて対応する。 ③究極的には、永代飼育に興味ある若者を市職員として雇用してオオルリシジミ保存を図る。
------------	--

付表1

保護回復事業計画 「評価シート（保護回復実施者）」

1 保護回復実施者による取組の自己評価

(1) 評価者 北信濃の里山を保全活用する会

(2) 取組における特記事項

県内でも限られた地域に生息するオオルリシジミの保護回復を図るため、生息地草原の茅場としての資源活用による保全の取組や飼育による種の保存と増殖による放飼、観察会等を通じた一般への普及啓発を行っている。

(3) 取組の評価と減少に関する意見

①取組内容の評価

項目	評価	コメント
取組の方法は適切か	○	飯山市とも協力し本種の保護回復を行っている。
取組の頻度は適切か	△	人員不足等により生息地の環境整備などが滞ることがある。
取組の成果 (対象種の動向)	△	本種の発生量は不安定である。

評価凡例 [◎:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分 -:判定外] 矢印凡例 [増加↑ 変化なし→ 減少↓]

②明らかとなった課題・問題点

計画・取組の課題・問題点	保全組織会員の高齢化・引退による作業労力の減少 温暖化による植生遷移・森林化の加速的進行
--------------	---

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に関する意見	本種は生物多様性の観点からも重要種であることから保全に係る人材確保・人的支援による計画の継続 行政のほか、学会等学術団体、「オオルリシジミ研究会」による他の保全組織との連携強化、保全手法の共有
------------	---

保護回復事業計画 「評価シート（保護回復実施者）」

1 保護回復実施者による取組の自己評価

(1) 評価者 姨捨の棚田オオルリシジミ保存会

(2) 取組における特記事項

- ・ 2020年5月に保存会を立上げ、10月に保護回復事業計画の認定を受け国の重要文化的景観「姨捨の棚田」選定地内で、絶滅してしまったオオルリシジミの復活に取り組みはじめた。
- ・ 2021年には、DNA解析結果に基づき遺伝子の近い「北御牧のオオルリシジミを守る会」より飼育個体の幼虫47匹の提供を受け累代飼育を行うと共に、生息環境整備として食草クララの増植や、保護啓発事業を行ってきた。
- ・ 2023年12月には、県の仲介で生物多様性パートナーシップ協定を5企業、1高等学校と締結し、支援を得て保護活動を実施している。
- ・ 2025年段階では自然繁殖の定着には至らないが、着実に増殖し、保護活動が広く周知されてきた。

(3) 取組の評価と減少に関する意見

①取組内容の評価

項目	評価	コメント
取組の方法は適切か	◎	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護地については、棚田耕作者の理解・協力を得て取り組んでいる。 2026年には、近くの(株)アクティオ工場敷地内でクララの栽培を予定。 ・ クララ苗の育成には、更級農業高等学校の協力支援を得て実施。 ・ 飼育方法等は、県内先進地や研究者の指導・助言を得て実施。 ・ 2024年から地元千曲市の支援を受け、保護活動を実施。 ・ 2025年7月に市民や県内先進地等に呼びかけフォーラムを開催。
取組の頻度は適切か	○	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次世代の保護人材の育成を兼ねて、見学会・観察会等を年に数回実施。 ・ 2025年から日本自然保護協会と共催し、姨捨の棚田で観察会を行った、今後も継続して実施の予定。 ・ 毎年5月～10月の間保護活動を実施、草刈りは毎月実施している。
取組の成果 (対象種の動向)	○	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2023年から増殖した蛹の一部を放蛹し、2025年には初めて幼虫を観察できたので、少しずつ自然繁殖が行われていると推察される。 ・ 2024年には、猛暑の影響か産卵数が激減し蛹の数も減少した。 ・ 2025年原因解明のために、安曇野オオルリシジミ保護対策会議の要請に応え、飼育個体の標本30点を分析用に提供した。

評価凡例 [◎:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分 -:判定外] 矢印凡例 [増加↑ 変化なし→ 減少↓]

②明らかとなった課題・問題点

計画・取組の課題・問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 飼育を始めて、気温の高温化した2024年を境に産卵数が激減し、そのために蛹の増殖数が減少している。当面は丁寧な飼育や、飼育場所での日陰・風通しを良くすること等に注意して飼育を行うが、深刻な課題である。 ・ 保存会発足当初から、次世代の保護人材の育成・確保が課題と、観察会や見学会の開催を行ってきたが、少子化や遊びや学習の多様化等で、参加者数の少ないことが課題である。
--------------	--

2 計画の継続・見直しに関する意見

計画継続に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当保存会では、実施期間等の変更を2024年10月17日付けで認定を受けたので、引き続き保護回復事業を実施してまいりたい。 当初 2020年10月21日～2026年3月31日までの概ね5か年間 変更 2020年10月21日～2031年3月31日までの概ね10か年間
------------	---